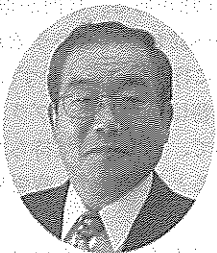




学校風景



創立90周年にあたり

同窓会長 伊東尚志

常日頃から同窓会活動に温かいご理解とご協力をいただいておりますこと、心より感謝申し上げます。

同窓会員の皆様にはますますご壮健でご活躍のこととご推察いたします。

昨年は、“ふるさとの象徴”をテーマにした映画「剣岳点の記」が公開され、日本アカデミー賞、優秀作品賞や最優秀監督賞など多くの賞を受賞し、全国で200万人以上の方がこの映画を鑑賞されました。

上市町が誇る剣岳、通学路や校舎の窓からその雄姿を仰ぎ見て勉学に励んだことを懐かしく思い出されたことと思います。

さて、我が母校は大正9年の創立から今年でめでたく90周年を迎えました。

これまでの歩みを振り返るとともに輝かしい歴史と伝統を継承し、更なる発展と飛躍を願い、来る10月22日には記念式典と記念公演を予定しております。特に記念公演は、上市高校出身の確井涼子さんが所属する「わらび座」を招いて演劇鑑賞をするものです。皆様方の絶大なるご支援、ご協力をお願いいたします。

同窓会員各位には、名実ともに伝統のある学校の卒業生として、また来るべき母校の創立100周年に向け、限らないご活躍を祈念してご挨拶といたします。



挨拶(あいさつ)

校長 金子 貞雄

会員の皆様には、益々ご健勝でご活躍のこととお喜び申し上げます。

また、日頃より本校の教育の充実・発展に多大なご支援をいただき、厚くお礼申し上げます。

さて、6月15日から4日間、本校で夏の「さわやか運動」が行われました。「おはよう」「おはようございます」「おはよう」元気な大きな声、少し小さな声、野太いもう大人の声、中には無言の生徒も、シャツを直されて少し照れている生徒もいます。保護者や先生(役員の生徒も)が上市駅・通学路・校門で生徒の登校を迎えている。こんな日がたまにはあっていいと思いながらその光景を眺めていました。

「挨拶」の語源を探ってみると、その昔禪宗の僧が、悟りの深さを試すための問答のことを「一挨拶(いちあいさつ)」とよんでいました。時がたつにつれて、それを日常生活にも用いるようになり、相手の様子を伺ったり寒暖の言葉を取り交わすようになりました。さらに言葉も略されて「挨拶(あいさつ)」となったようです。

「朝の挨拶：おはよう(ございます)」「昼の挨拶(こんにちは)」「職員等の出入り：失礼します。失礼しました。」「さようなら」「ありがとう(ございました)」「ごめん(すみませんでした)」等があり細かい状況を考えれば、まだまだあります。「おはよう(ございます)」のなかには「今日もよろしく」「調子はどう元気」「会えてうれしい」等様々な意味が含まれているように、挨拶の簡単で短い定型の言葉に様々な状況に対する深い気持ちが込められています。

若者のコミュニケーション能力不足が心配されていますが、コミュニケーションの入り口は挨拶だと思います。校内の様子を見るとほとんどの生徒が、挨拶を交わしてくれますが、まだ自分からはできない生徒も見られます。4日間の「さわやか運動」の取り組みを見て、あらためて挨拶の大切さを感じ、しっかり挨拶のできる学校にしたいと思いました。

21年度卒業生の進路は大学・短大が43%、専門学校36%、就職が20%で、22年度インターハイの参加者はボクシング3人、空手2人、カヌー1人でした。高校総体県予選では、一人ひとりが自分の力を信じて戦えばもう1回は勝てると思いながら本校生徒の試合を見ていました。カッコいい場面はあまりないが、生徒がひたむきに一生懸命やっている姿に心惹かれる一人です。



さわやかな救い

副校長 國香 正稔

宇都宮への二泊三日の出張から戻り、ぐったりして改札にたどり着いた。まだ自宅まで五分の徒歩が残っている。改札を抜けたところで「先生！」と声がかかった。

「覚えてますか、私。わかるかな？」とやや心細い声の主は黄色い髪にお化粧たっぷりの若い女の子。ビジネススタイルのほくとは全くのミスマッチと思いつつも、近寄ってしばし凝視すると教室で制服を着ているようすが浮かんだ。「久しぶり。元気そうやね、〇〇さん」と名前を思い出すこともできた。「うん、元気やよ。」同じスタイルの女の子と列車でお出かけのようで、それだけの会話で別れたが、不思議なことに、疲労感が消え、足取りも荷物も軽くなっている。

この夏は富山でも記録的に暑い日が続いた。その暑さの中、宇都宮市へ出かけた。宇都宮は関東平野の中でも特に気温が上がる地点で、確かに暑かった。ギョウザとジャズとカクテルが売り出し中と勧められ、食べ過ぎたり、夜更かししたりした。また、近くには「大谷石(お

およいし)」という石材の産地がある。専門が地層・岩石ということから、その大谷へ訪れたいという欲が出て、用事が済んだ後、路線バスに行き帰る三十分ずつゆられ、現地を見学した。本来の用務はもちろん、プラスアルファの部分も十分に成果を得て、充実した気持ちで帰路についたはずだが、列車に乗ると気が抜け、疲労感におそわれた。

家へ歩きながら思い返してみると、彼女はほくが着任したばかりの頃から、駅のホームなどで「おはようございます」と元気よく、進んで、笑顔で声をかけてきた。名前をすぐに思い出したのもそのせいだろう。新任地にまだ馴染んでいないがゆえの気の重さを、少なからず軽くしてくれたありがたさを思い出す。出張の疲れを吹き飛ばしてくれたのは、そのありがたい経験がよみがえったことも影響しているだろう。学校では先生が生徒に教え、元気づけるというのが筋だが、実態としては案外、ほくが生徒の世話になるということも多い。卒業してからも、いろんな形で世話になる。あのひと声がなければ、疲れを抱えたまま帰宅しただろう。

同窓会の皆さんにもこのエピソードをお伝えし、感謝の気持ちを表明したい。上市高校にお世話になって二年目、救われた話である。